

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月22日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2012

課題番号：20529001

研究課題名（和文） 極東地域における靺鞨に関する考古学的研究

研究課題名（英文） Archaeological Research on the Mohe Tribes in the Far East

研究代表者

木山 克彦（KIYAMA KATSUHIKO）

北海道大学・スラブ研究センター・助教

研究者番号：20507248

研究成果の概要（和文）：

6世紀後半に成立した極東全域に広がる「靺鞨罐」とその前代の土器群を比較分析した結果、アムール流域に起源が求められること、また齊一的とされる「靺鞨罐」にも地域差が認められ、背景に地域毎の前代からの土器製作伝統を反映していることを明らかとした。以上の考古学的状況は、靺鞨が成立以前の各族の関係や、習俗が異なる集団を含んで成立した靺鞨族の実態を反映していると推測することができる。

研究成果の概要（英文）：

As a result of making the comparative analysis of the earthenware group of the early iron ages and Mohe type pottery which spreads throughout the Far East in the second half of the 6th century, it showed clearly that the Amur valley is asked for the origin of Mohe type pottery. But although it is similar apparently, observe regional differences are observed in Mohe type pottery. This situation reflects the earthenware manufacture tradition from the former ages for every area in a background.

Mohe can surmise that the above archaeological situation is reflecting the relation of each fellows before formation, and the actual condition of Mohe in which it was materialized including the group from whom a tradition differs.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	0	1,000,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	720,000	4,120,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：考古学・アジア考古学

キーワード：北東アジア考古学、靺鞨、初期鉄器時代、地域間交渉、土器研究

1. 研究開始当初の背景

諸集団を統べ極東全域に住地を広げた靺鞨族の成立は、古代における大きな社会変動である。その影響はサハリン、日本にも及びオホーツク文化の成立にも寄与した。この族

集団による広域分布圏の確立は、その後の歴史展開の共通基盤となっている。

靺鞨族の成立や内部構造に関しては、主に東洋史研究の分野での蓄積がある。但し、史書のみでの分析では、無文字社会における実相

は十分に明らかにできず、考古学的な分析を加味した総合的な検討が必要とされている。長い間ロシアと中国の考古学情報が限られていたが、近年では、政治情勢の変化から分析しうる資料が飛躍的に増加し、靺鞨の系譜や地域差、その後の展開の詳細が検討できる態勢が整いつつある。

今後の研究としては、靺鞨以前（扶余、挹婁、沃沮等族集団にあたる初期鉄器時代諸文化の資料）と靺鞨罐成立期の資料分析をより充実させ、地域毎に両代の資料の詳細を整理し、内在する時系列的な地域伝統と地域間を繋ぐ関係性を紐解き、歴史背景を加味しながら、地域集団の動向と地域間関係の推移を復元する必要が求められている。

2. 研究の目的

本研究では、6世紀後半に前代からいた諸集団を統合し、ロシア極東・中国東北部全域に住地を広げた「靺鞨」族の様相とその成立過程について考古学的に解明しようとするものである。靺鞨族の成立時には、同族が使用したとされる「靺鞨罐」と呼称される土器が極東全域に斉一的に広まる。本研究では、この靺鞨罐と靺鞨罐成立以前（初期鉄器時代）の土器資料を分析対象として、各地域における在土器の製作伝統がどのような変遷を辿り、靺鞨罐が形成されるに至ったか、そして地域毎の靺鞨罐の分析を通じて広域に渡る当時の地域間関係を検討することを目的とする。またこの作業を通じて極東地域の当該期の広域編年の確立を目指す。

3. 研究の方法

本研究では、極東各地域の土器群を通時的に分析することにより、系統性と地域性を把握し、地域間関係の描出を試みる。分析対象資料の多くは、海外の研究機関に収蔵されており、詳細な分析を行う為、実地調査を行う必要がある。

本研究の分析は、以下の通りで進めている。上記の地域の資料は膨大にある為、文化・地域毎に良好な資料の纏まりのある遺跡を選定する。そして施文技術を含む文様や成形技法、胎土の製作を含む器形等の諸属性を観察し、各文化・地域の土器群がどのように構成されているのかを明らかにする。

靺鞨罐成立前・靺鞨罐成立期の両期で同様の分析を行い、各地域での土器の変遷過程と土器製作技術の系統関係を把握する。

地域間で技術伝統を比較し、結果、得られた地域間の共通性と差異を土器製作技術における情報伝播の多寡を反映したものと見做し、地域間関係とその背景について考察する。

5年間の研究活動で、当初の研究計画に挙

げた研究機関（ロシア科学アカデミー極東支部、同シベリア支部、ハバロフスク州立博物館、中国黒龍江省文物考古研究所、黒龍省博物館、吉林省文物考古研究所、吉林省博物館、吉林市博物館、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館）及び分析対象資料（各地の靺鞨罐及び前代の初期鉄器時代資料）については、ほぼ全て実見することができた。

また資料調査と併行して、平成23年度からはロシア沿海地方では、野外調査を実施した。対象としたのは靺鞨罐成立以前のポリツェIII期に属するエリザベトフカ1遺跡である。ポリツェIII期は、ポリツェ文化が沿海地方に拡大する時期である。この拡大した地域がその後の靺鞨罐の基盤となると申請者は考えている。ロシア沿海地方とアムール流域の中間地点に所在する同遺跡の把握は、同文化の拡大過程の詳細を明らかにする上で重要な位置を占めており、調査の実施によって資料の増加を図ることができた。

4. 研究成果

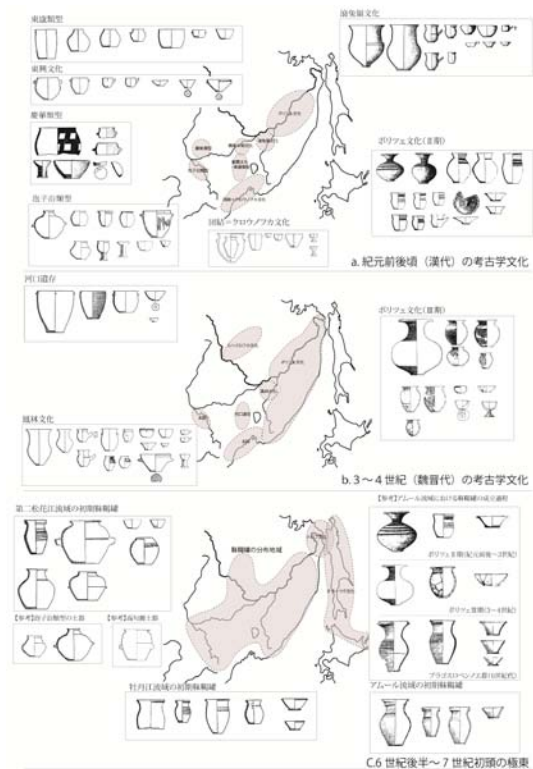


図1 靺鞨罐成立及びそれ以前の極東の考古学文化

5年間の研究の結果、本計画に挙げた極東地域の靺鞨成立前の各文化と靺鞨初期の資料は概ね実見できたことになる。成果としては次の点が挙げられる。図1-a.及び同図b.は、漢～魏晋代頃に靺鞨罐が展開した地域の考古学文化における土器群である。本研究で靺鞨罐成立前の実見、分析対象とした土器群である。当期では、各地域に独自の土器文化

が展開している。いずれの地域でも前段階の地域伝統を継承しており、独自性を生んでいる。一方で、隣接文化間で器種や文様要素の一部を共有する様相も見取れる。またこの時期は、金属器が広範に流通・普及した時期でもある。第二松花江流域から東では徐々に種類・量が減少するが、アムール流域の金属器は第二松花江流域から得ている可能性が指摘されており、隣接文化間または遠隔地の文化間での流通網が形成されていたと考えられる。

このような広域な交渉圏の形成が認められるにも関わらず、その関係は平和裡ではなかったとみられ、特に三江平原、ロシア沿海地方で、高地性ないし防御性を示す集落が現れる。また魏晋代においては、ポリツェ文化が分布域を拡大し、ロシア沿海地方でも在地伝統の要素を残しながらも大きく土器群が転換する(図1-b.)。アムール流域では平原占地の集落であるが、沿海地方のポリツェ文化では丘陵上や段丘上に占地する傾向を示し、土塁で囲郭した集落構造を持つ遺跡が認められる。この拡大もまた集団間の軋轢に伴うものと考えられる。

この時期の土器群と靺鞨罐成立期の土器群と比較すると、ロシア・アムール流域では靺鞨罐前代から成立にかけて系統的連続性が高い一方で、中国領内の多くの地域で両時期の土器型式には大きな断絶が認められた。

現状では、靺鞨罐の成立過程が辿れるのは、アムール中流域のポリツェ文化のみである(図1-c.)。アムール流域以外では日常什器の大幅改編が行われ、それまでの多器種組成が、深鉢、杯を中心に再編され、文様も齊一的に変化する。

但し、詳細にみると齊一的とされる靺鞨罐にも地域差は残る。第二松花江流域では、泡子沿類型や高句麗の系譜を引く陶質土器が伴う(図1-c.)。また牡丹江流域では、無文の靺鞨罐が一定量出土し、頸部に貼瘤文を持つ土器が出土する(図1-c.)。靺鞨罐の起源地と考えられるアムール流域では有文率が高い。前段階に展開した河口遺存の無文率の高さからの系譜と考えられる(図1-b.)。

現状では検討できる地域は少ないが、齊一的な「靺鞨罐化」の中にも前代からの土器製作伝統は温存されると考えられる。

夫餘は、隣接諸国・集団と拮抗する関係にあり、三世紀後半に慕容鮮卑の侵攻を受けて以後衰退し、最終的には高句麗と挹婁の後裔である勿吉に滅ぼされる。5世紀半ばのことである。勿吉は6世紀後半に靺鞨となる。靺鞨は7大部に分かれ、村落ごとに統率者がいたが、これらを束ねる統一的な統率者は存在しなかったとされる。ここでの地域差は前代の夫餘、沃沮、挹婁といった諸集団の違いが基盤になったとみられている(日野一九四

七)。靺鞨罐がアムール流域において成立したとする推定が妥当ならば、挹婁・勿吉が各地域に拡大したことが什器組成の変容を引き起こしたとみなせるのではなからうか。一方で、齊一性の中に残る地域差は、習俗が異なる集団を含んで成立した靺鞨族の実態を反映しているという推定が導き出せた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

- ① 木山克彦 「ロシア沿海地方の渤海土器」『海と考古学』第8号、57~77頁、海交史研究会(2012, 6) 査読無し
- ② 木山克彦 「渤海土器の展開と周辺地域」『考古学ジャーナル』2010年10月号 No.605、18~21頁、ニューサイエンス社(2010.10) 査読無し
- ③ 木山克彦 「菊池俊彦著; オホーツクの古代史」『古代文化』第62巻1号、148~150頁、古代学協会(2010.6) 査読有り
- ④ 木山克彦 「靺鞨成立に関する考古学的研究—ロシア沿海州ビギン川流域の調査を中心に—」『高梨学術奨励基金年報 平成20年度研究成果概要報告』14~17頁、財団法人高梨学術奨励基金(2009.11) 査読無し
- ⑤ 木山克彦 訳 ヴァシレフスキー A.A.、グリシエンコ V.A.、フェドルチュク V.D.、モジャエフ A.V. 「2003~2007年におけるサハリン国立大学による考古学調査」『北海道考古学』第45輯 45~58頁、北海道考古学会(2009.3) 査読有り

[学会発表] (計13件)

- ① 木山克彦・臼杵勲・Yu.G. ニキーチン 「ロシア沿海地方エリザベトフカ1遺跡の調査」『第14回北アジア遺跡調査報告会』石川県立歴史博物館(石川県)(2013, 2.9)
- ② 千田嘉博・正司哲朗・臼杵勲・木山克彦・A.エンフトゥル 「モンゴル中世城郭の3次元計測調査」『第14回北アジア遺跡調査報告会』石川県立歴史博物館(石川県)(2013, 2.9)
- ③ 木山克彦・臼杵勲・Yu.G. ニキーチン 「극동지역의 초기철기시대—러시아 연해지방 엘리자베토브카(Елизаветовка)1 유적의 조사로부터」『동아시아 考古學의 最前線—最新 海外調査에 바탕한 農耕과 非農耕 地域의 比較研究』嶺南大学(韓国)(2013, 2.2)
- ④ 臼杵勲・木山克彦・千田嘉博・A.エンフトゥル 「몽골草原의 都市遺蹟—친틀고이 성지(거란時代)의 조사성과를

- 중심으로」『동아시아 考古學의
最前線－最新 海外調査에 바탕한
農耕과 非農耕 地域의
比較研究』嶺南大学(韓国) (2013.2.2)
- ⑤ 木山克彦「モンゴル・ロシアにおける古
代・中世遺跡の調査」『研究会：内陸アジ
ア・北東アジアにおける古代国家形成の
諸問題』札幌学院大学(北海道)
(2012.12.8)
- ⑥ 木山克彦・臼杵勲「靺鞨罐的形成過程」
『2011 東北亞早期鉄器時代考古国際学
術研究会』中国人民大学(中国)
(2011.12.9)
- ⑦ KIYAMA Katsuhiko 「Preliminary study of
“Khitani pottery” from Chintolgoi kiln,
Mongol」『Siberia – Mongol –Far
East:Archaeological Discourse IREES,
Seoul National Universty and SRC,
Hokkaido University Joint Symposim 2011』
Institute for Russian, East European and
Eurasian Studies, Seoul National University.
(Korea) (2011.11.19)
- ⑧ 木山克彦・臼杵勲・Yu.Gニキーチン・N.N.
クラージン「ロシア沿海地方エリザベト
フカ 1 遺跡・ロシーナ 6 遺跡の調査」『第
12 回北アジア遺跡調査報告会』札幌学院
大学(北海道) (2011.3.6)
- ⑨ 木山克彦「紀元前後～7 世紀代における
極東・サハリン・北海道北部の考古学的
様相」『新しいアイヌ史構築 第 1 回小
シンポジウム(先史編)』北海道大学アイ
ヌ・先住民センター(北海道) (2010.9.3)
- ⑩ Кияма Кацухико 「Программные туры как
популярный вид научных исследований в
регионах Восточной Азии」
『АКТУАЛЬНЫЕ ПРОБЛЕМЫ
СОЦИАЛЬНОЙ КОММУНИКАЦИИ.
Материалы первой международной
научно – практической конференции.』
Нижегородский государственный
технический университет им Р. Е.
Алексеева. (Россия) (2010.5.22)

[図書] (計 7 件)

- ① 木山克彦・臼杵勲・千田嘉博・正司哲朗・
A.エンフトゥル「チントルゴイ城址とそ
の周辺遺跡」『アジア遊学 No.160 契丹
[遼]と 10～12 世紀の東部ユーラシア』205
～220 頁、勉誠出版 (2013.1)
- ② 木山克彦「紀元前後～7 世紀代における
極東・サハリン・北海道北部の考古学的
様相」『新しいアイヌ史の構築 先史編
古代編 中世編 新しいアイヌ史の構築
プロジェクト報告書』38～49 頁 北海道
大学アイヌ・先住民センター (2012.3)
- ③ 木山克彦「靺鞨・渤海・女真の考古学」
『アジア遊学 No.139 特集・アイヌ史を

問いなおす 生態・交流・文化継承』138
～147 頁、勉誠出版 (2011.3)

- ④ 木山克彦「靺鞨罐」の成立について」『北
東アジアの歴史と文化』165～189 頁、北
海道大学出版会 (2010.12)
- ⑤ 木山克彦「バグラニーチノエ城址」、「マ
イスコエ城址」、「アナニエフカ城址」、「ゴ
ルノフトル城址」、「ステクリャヌーハ城
址」、「スモリャニノフスコエ城址」、「ノ
ヴォネジンスコエ城址」、「アヌチノ城址」、
「シクリャエフスコエ城址」、「シャイガ
城址」、「ニコラエフカ城址」、「エカテリ
ノフカ城址」、「ラゾ城址」、「マリャノフ
カ城址」、「ユルコフスコエ城址」『北東ア
ジア中世城郭集成 I ロシア沿海地方：
金・東夏 1』11 頁、17 頁、33 頁、37、
38 頁、41 頁、43、44 頁、47、48 頁、49、
50 頁、52 頁、59、60 頁、64、65 頁、68
頁、73、74 頁、76 頁、78、79 頁、札幌
学院大学総合研究所 (2010.4)
- ⑥ 木山克彦「パクロフカ文化における陶質
土器の展開」『中世東アジアの周縁世界』
29～43 頁、同成社 (2009.11)
- ⑦ 木山克彦「極東の土器終焉」『中世東アジ
アの周縁世界』108～111 頁、同成社
(2009.11)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

ホームページ等

無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木山 克彦 (KIYAMA KATSUHIKO)

北海道大学・スラブ研究センター・助教

研究者番号：20507248